

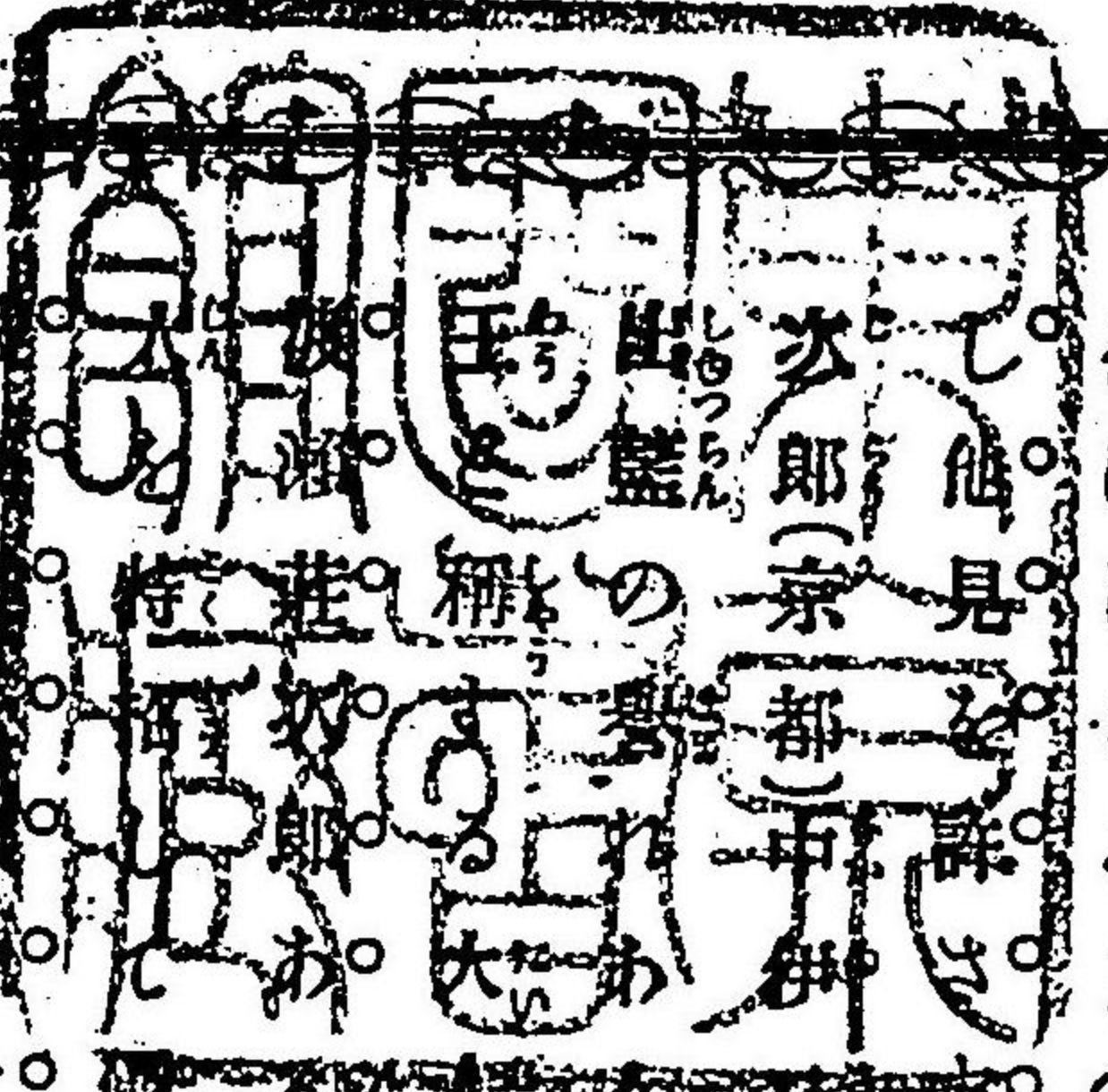
66
137

館書圖京東				
二	一		六	
冊	三	架	函	類
	七			門
	號			

新按
定跡
高等將
慕秘訣
乾

○新按高等將棋秘訣序

我國將棋中興の基宗天野宗歩大人嘗て將棋精選三冊を著し深く之を管庫に公けにさるゝの後ち基技秘鍵數卷を著し深く之を管庫に



て他見を許さず。然るに大人の門人數百人の中に於て渡瀬莊次郎(京都)中興の基宗天野宗歩大人嘗て將棋精選三冊を著し深く之を管庫に公けにさるゝの後ち基技秘鍵數卷を著し深く之を管庫に

○高等將棋秘訣の序

り遊ぶ山本君の嚴父喜んで渡瀬を自家に呼び尊羹醇醪を以て渡瀬を厚遇したるに依り渡瀬の大山本君嚴父の厚意に感じ先師天野大人より傳授したる碁技秘鍵を山本君の嚴父に授く余が父と山本君の嚴父と善し而して余も亦た今の山本新次郎君に嘗て執贊の禮を爲し碁道秘鍵を授かりて久しく我家に藏せしが頃日伊東洋二郎が余に奨めて頻り久之を公けにせんことを請ふ余之を諾し定新按高等將棋秘訣と命名して刊行をなさしむ將碁の我國に行はるや久し而して往時碁道の達人頻りに輩出して碁道社會に一旗幟を翻へし一時の碁壇を睥睨せし大家其人に乏しからずと雖も碁道の上に一生涯面を開きし人は唯た天野宗歩大人あるのみ夫れ大人の碁技に於けるや之を天稟に歸す大人の天稟の固より争ふべ

からず願みるに寛政年間將碁の盛んに世も行はるや伊藤大橋の門生に碁技の達人頗る多かりしも亦た是れ古人先輩の訓誥を矜式と爲し定石を聞記して對局し來れるものに過ぎず其獨自一己の碁眼を涯注して以て我國の碁道を改進せしめしもの古往今來天野大人の外未だ之をあらざるなり抑も大人の定石を審查するに大に即ち碁道の本源に遡り細は即ち人情の嗜樂を推し之を往時に徴し之を當時に求め之を碁の數勢に究考し其指手の巧拙敏緩より其變化の利害得失に至るまで細大遺す所なく旁考博查之を斷するに自己の識見を以てしたるが如きハ舊來古人先輩の訓誥を矜式と爲し定石を聞記して僅かに碁道を磨磨する者と其撰を異にす余が古往今來大人の如き達碁家なしと云ふ所以のもの豈に其

れ經言なるへけんや否な大人を稱揚する者の獨り余のみに
あらず天下の好碁家の擧りて大人を仰止し風靡影慕せざる
の將碁精選の如き苟も好碁家たる者之を購讀して對局の
參考とせざるはなし而して彼書に出る定石の理義高尚の嫌
ひなき能はず然れども大人の著書として既に世に行はるゝ
ものは未だ彼書の外之あらず若し夫れ奇正變化勝敗優劣宛
も親しく局に臨みて觀るが如きもの實に此書の特色にし
て彼書に優ること更に上乘なりとす讀者幸に此意を諒せよ

五段允可 飯万島龍水誌

凡例

一將碁の技たるや最も深遠なる思考を以て熟練を計るを要す
其深遠なる思考を爲すに定石を學ぶより善きなく熟練
を計るに番數を重ぬるより善きなし然りと雖も其定石
を學び番數を重ぬるには多くの歲月を費さざるを得ず近來
世間頻繁人事多忙に赴き何人も光陰を徒費するを惜むの時
運に當り何の餘暇か將碁を學ぶ爲めに多くの歲月を費し得
る人あらんや左り乍ら吾人の娛樂となるもの亦た此將碁に
勝るもの他にあるへからず茲に於て時運を鑑み人氣を計
りて此書を世に公けよせざるを得ざるに至れるなり
一既に前項に言ふが如く此書の専ら現今の時運と人氣とを觀
察して其實際に適應せん事を圖りて修述したるものなれば

毎番必ず飯万島が批評及意見を聞き添加へたり、是れ天野
大人原著書の太だ高尙に過ぎ了解の容易ならざるものある
を以てなり讀者之を諒せよ

一 又天野大人が一生涯中に於る碁道秘話の如きの随聞隨筆に
かゝるが故に意義の通達せざる所文字の措落せざる所殊に
多し、然れども唯だ空しく筐底に投じ置きて蠢魚の腹を飽か
しむるの甚だ余の遺憾とする所とす仍て余の其碁道秘話中
を間々校訂類別して此書中に挿入したり、是れ猶ほ塵埃を埋
れる珠玉を採掘して以て碁道の手段又聞き者の脚下を照耀
するの料たるに足るべきのみ否な解剖入微發蘊抉秘復た遺
憾なしと言んのみ

一 飯万島大人の碁技の其師資系統より警查し來るに我國碁道

の一生面を開きし天野宗歩大人より繼紹せるものと言ふて
可なること既に飯万島大人の自序を讀みて之を知るに足ら
ん、而して大人の碁技位格は今や五段たり其一方の碁宗とし
て尾參勢濃飛信諸國に雄飛するもの、必ず其素なくんばあ
らす殊に大人尙は前途多望の春秋に富めり、其今より尙は碁
技進み位格昇りて更に一世を震撼するに至らんこと余の信
じて疑はざる所なり余の大人の碁技超凡なるを見て特に之
を記し以て廣く大方に紹介す

一 本書を熟讀して不審の所あらば郵税二錢を添へ名古屋裏門
前町四百九十五番戸伊東洋二郎宛にて質疑あるべし、然らば
則ち飯万島大人の辨明を聞きて回答する所あらん
一 古今坊間に行はるゝ將碁定石書の悉く皆な指手繁冗にして

且つ粗笨なりと雖も、此天野大人の定石と至りては指手最も
 敏活精核なること未だ古今其比を見ざる所なるに依り世の
 將碁を學ぶ人にして此意を諒知し其碁眼を洞開し觀識を博
 ふせば則ち速に碁技の上達せんこと毫も疑ひあるべからず
 讀者此書中定石の一手二手と指來り指去る所の上に能く注
 意し以て發明する所あるを要す

明治庚午夏日

伊東洋二郎記

新按 定石 高等將碁訣秘目錄

將碁駒組秘訣 附駒組大法二十五ヶ條……………十三頁

四枚落定石規箴……………十六頁

四枚落 下手方居飛車……………十七頁 同二變化……………二十頁

同三變化……………二十三頁 同四變化……………二十六頁

二枚落定石規箴……………廿八頁

二枚落 下手方手傳組……………三十頁 同二變化……………三十三頁

同三變化……………三十五頁 同四變化……………三十八頁

同五變化……………四十一頁

飛香落定石規箴……………四十三頁

飛香落 下手方早掛り……………四十五頁 同二變化 上手方八七金止メ……………四十八頁

同三變化 上手方七七金……………五十一頁

飛車落定石規箴	五十二頁
飛車落 <small>下手方六五歩 早突</small>	五十四頁
同三變化	五十九頁
同五變化	六十四頁
同七變化	七七金立	六十九頁
同	<small>下手方居飛車</small>	七十四頁
同三變化	七十九頁
同五變化	<small>上手方の意味 下手方の心得</small>	八十四頁
同七變化	<small>上手方七七金止め 下手方早四間</small>	八十九頁
角行落定石規箴	九十三頁
角行落	<small>下手方橋早掛り</small>	九十五頁
同三變化	<small>上手方端指 下手方銀冠り</small>	百一頁
右香車落定石規箴	百六頁

右香車落	百廿三頁
左香車落定石規箴	百六頁
左香車落	六八角引	百八頁
同三變化	百十二頁
同五變化	<small>下手方端歩早突</small>	百十七頁
平手定石規箴	百廿五頁
平手	<small>居飛車四間</small>	百二十九頁
同三變化	五五歩止め	百三十五頁
同五變化	百四十一頁
同七變化	中飛五五歩止め	百四十六頁
同九變化	腰掛銀	百五十二頁
同十一變化	筋違角	百五十八頁
同二變化	百三十二頁
同四變化	石田崩シ	百三十八頁
同六變化	橋銀受	百四十三頁
同八變化	百四十九頁
同十變化	百五十五頁
同十二	捨飛車	百六十一頁
同二變化	<small>下手方端飛廻り</small>	百十頁
同四變化	<small>上手方端飛早廻り</small>	百十五頁

新按 高等將棋秘訣目錄 畢

新按 高等將棋秘訣 乾の巻

故人 天野宗步大人傳授

五段允可飯万島龍水大人稿按
無段 伊東洋二郎筆受

將棋 駒組秘訣

名人に駒組なしと云ふは、謂へるは悉く未を知て敵の虚實を謀り虚あれば則ち其所に進む、進む内も内を圍み放て外實にして虚なく駒自由に働くなり
上手は悉く未を知ると難し只當然を以て駒組の法を調ふに勿論自由に働くと雖ども未又差
聞あるを多し 修行にあらざれば未まで知りがたし然れども其變を知るを早くして駒を
組換ゆるなり

下手は駒組の法を知らざる故駒不自由なり況んや變に向ふ時は是を知らざる故急に組換ゆることも成り難く、彌々不自由に成り差問多し之に依て未熟の爲めに駒組定法其變を記す

駒組大法

- (第一) 王早く肩突くべし
- (第二) 王角の筋用捨すべし
- (第三) 王の脇金銀は成るべからず
- (第四) 金銀歩の頭に上ると見合すべし金は進むと早く退くと遅し
- (第五) 桂のどひ見合肝要なり遅き時は勝少し早き時は損となるべし
- (第六) 持駒直に當る様に打つは常なり
- (第七) 願くは含みありて打つべし
- (第八) 相手の持駒何々と問ふと屢々すべからず
- (第九) 駒駢ぶる時貴人の方へ王を雙と心得べし
- (第十) 同手三度までするとなかれ
但三度に及ぶとき仕掛の方より替るべし是を千日手と云ふ
- (第十一) 端の歩漫り又突くべうらず手後れに成ると多し

- (第十二) 香のト通りの駒たりと雖も端の仕掛肝要なり
- (第十三) 駒を手に持ちての働さ格別なり歩勿論なり
- (第十四) 敵の歩切勘考すべさと専一なり
- (第十五) 歩二つより大切にすべき事
- (第十六) 飛角の捨場大事なり
- (第十七) 駒離れぬ様に上るべし
- (第十八) 龍馬手前にて遣ふと宜し
- (第十九) 駒打込みて取らぬと勘考べし
- (第二十) 王逃げ置に能手ある事
- (第二十一) 手前に歩打つと大事なり
- (第二十二) 進んで其駒よて前を圍ひ前を圍ての仕掛ると駒組の大意上手の態なり
- (第二十三) 總じて五筋或の端に手あると多し
- (第二十四) 總じて勝つとを専とすべうらず手前を全く守り負けざる事を肝要とする時

の目ら勝に向ふべし

(第二十五) 駒組の定法の双方宜手を撰ての事なり敵定法を離れ仕掛ることあり驚くべからず必ず末に差問あるなり

以上に列挙する所の碁道駒組大法よして、古來名人上手の矜式とする所なり若し能く此大法を暗記して一手一指來り指去る所能く此大法に準據して毫も戻る所なくんば、闘碁勝敗を決するに方りて其敗駒を取るが如きとなりるべきなり

夫れ然り而して碁道初學の人の潜心工夫して碁理を考究すべきもの定石なり、茲に於てか定石四十九番を順次に掲げ其後手及變化を示し加るに余の批評を添ふ、是れ深遠高邁なる定石の碁理を明決ならしむるの意なり

○ 四枚落定石規箴

我國將碁の行ゆるや久しと雖も四枚落、六枚落等の定石を考案し出せし人の唯天野宗歩大人あるのみ、大人の創見に據て四枚落、六枚落の將碁定石漸くに世に行ゆるに至りしが故に其之に關して古來名人上手の垂範箴言一も未だあらざるの固より其當さに然るべ

下手方八
二飛車引
手よし

九八の歩
打手必勝
なり

第一圖

落 枚 四

星	桂	銀	王	銀	桂	星
	飛				角	
		歩	歩	歩	歩	歩
	銀					
歩		歩	歩	歩	歩	歩
	歩		王	銀	歩	歩
歩	銀	金			金	
	桂					桂

下手方居飛車

さ所なり

然りと雖も余の見る所を以てせば、四枚落の定石の大抵二枚落將棋の駒立に指せるものゝ如し唯た尋常二枚落の將棋駒立に比較して違ふ所の指方の細がさを荒きとの別あるに過ぎず、語を換て云へば二枚落の駒立に下手方の指方細かく指し四枚落の駒立に下手方の指方荒く指せるものゝ如し然らば則ち四枚落に二枚落を指す心持にて大抵可なるに似たれども、自から其内に指方を細かくすると荒くするとの別なくんばあらざるなり請ふ其意を知らんと欲せば、是れより下に掲る四枚落定石を採究せんことを

●第一圖(説明)

四銀八歩 五歩八歩 七銀八歩 八歩八歩 二飛八金 七銀七歩 八銀八歩 七銀
 六歩八王 四歩七王 五歩七歩 六歩九歩 六歩九歩 八金

(後手) 六銀七歩 九歩九歩 九歩八歩 七銀八歩 六歩九歩 七金八歩 八銀八歩 七金九歩 七金九歩 七桂八銀打にて下手方宜し
 を付て此成とにて寄せ下手方宜し

(變化) 春 八金の處 七金九銀 〇 八歩七歩 七銀八銀 七金九歩 七桂八銀打にて下手方宜し
 (變化) 〇 八歩の處 八王九歩 九銀七銀 七金八歩 六金八飛 七歩にて下手方宜し

下手方九六銀と歩を取りて進むとき九七歩と打つ、然るよ之れを捨置き銀を取らせ九九歩と成る手宜し其後に至り端を空虚になして香飛相接して成込手段深遠最妙なりと云ふべし又下手方が九九歩と打つとき上手方三七金と上る手王を活路を開くの手段とす此れ等の手段を能く心に留めて基技を學ぶは初心の者の肝要とする所なり

之を要するに前に云ふ下手方の駒組の鵬眼視爲視九仍の重壁をも初めより能く窺ひ得たる所あるものなり、上手方の盤上の風雲離奇天矯を極むるに依りて詐謀譎計を種々に回らすも下手方の泰然白若として對應し遂に龍騰の機を開くもの亦誠と稱揚すべきのみ

此の如く下手方の泰然白若として上手方の鋭手を受けつゝ自己の衰勢を鞭撻し毅然敢然として自己の弱勢を扶植し、以て自己の元氣を振ひ以て自己の勇氣を鼓し彼の上手方の手段中に苟も隙の乗すべき時到来し則ち活潑々地の手腕を揮つて以て彼を碎き破るの状あるべきなり、事茲に至つて上手方の詐謀譎計も亦何の効なきなり管に何の効もなきのみならず上手方の遂に下手方の驍勇なる猛勇に當り得へからずして至たく敗衄するに至るべきなり

五四へ銀
上る手不
利なり深
く考べき
なり

第貳圖

四枚落變化其二

下手方一
七の歩面
白し

星	科	銀	王	科	銀	科	星
飛						角	
		歩	歩	歩	歩	歩	
		歩	歩	歩	銀	歩	
		金	金		歩		歩
	歩			王			桂
	銀						
	桂						

(説明) 八金四歩八銀四歩七歩七金二銀六歩八銀八金四銀七金九歩五歩五歩八王九飛
 四銀九歩六歩九飛七歩九飛七銀四歩四銀五歩六歩三歩七歩七桂

(後手) 四角五歩二飛五歩六飛八歩四飛六金六歩五金二角四歩五歩四金七歩にて下手方宜し
 (變化) 五七桂の處五歩八歩七桂三飛六歩七金此未成にて桂を取る工風にて宜し如此
 上手方左の方手厚く防く時は下手方左の端を如此に指て宜し
 下手方轉して一四歩を突き出して歩を切り置き亦一七歩と打ち是を桂にて取らせる手は最も
 妙なり且つ敵方不備なるに乗じ飛を廻りて攻め入りの方策も亦頗る好し而して上手方は
 四五金上りて角を退け而して王を北くるの路を求むべければ下手方は夫れに對するの手段
 を施さざる可らず

上手方の四五金上りて角を退くる手は一髪萬鈞を繋ぐの危機に際し下手方の呑喰搦倒せんと欲するを防禦するにあるが故に下手方は、此意を諒して奇捷明敏火脚電奔の漸手段を施さば則ち上手方全く敗れたらんと思へ、下手方深く其れ之を思へ

抑も此定石の初め下手方が一四歩を突き出すの手は後に至り飛を以て敵地に攻め入るの伏線なり、之を喰ふれば則ち故蓬死麻一健の飛火を以て曠原千里を燎くの思ひあり何ぞ其手段の遠謀深慮なるや圍碁の妙手は實に敵に此の如くならざるへからず、然れども上手方が下手方に對する防禦の手段も平凡ならざるものあり當に平凡ならざるものあるのみならず往々下手方に對し一頓挫を試みて弄ぶの趣あり、亦た以て其粉々速々たる裡にあるにも拘りらず綿々として餘裕ある所を示すものにあらざるなからんや是れ上手方の伎倆は下手方に優る所あるを証するに足れり下手方は能く深く注意して彼れに向へ其深謀遠慮を圍碁に發揮する所なくんば或は下手方の初めの駒立善きにも拘りらず其負にならんも亦未だ知るべからず、何ぞ慎重する所なくして可ならんや

九二へ飛を寄せ端の歩を切り置く手最もよし

九八の歩習ひあり

第三圖

四枚落變化其三

星	桂		王	銀	桂	星
	飛				角	
		歩	歩	歩	歩	
	銀			歩		
	歩					歩
		歩	歩	歩	歩	
歩	歩	金	金	王	歩	歩
	銀				銀	
	桂				桂	

(説明) 八金四歩八銀八歩七歩七金七銀六歩八銀秋八金四銀七金四歩五歩九歩五王二
飛冬六歩九歩同歩同飛七歩九飛七王四歩六歩五歩二銀八飛

(後手) 七銀八歩五歩九銀七歩六歩同歩九歩同銀八銀五歩同飛七金七銀五金七金此末六角
の出よて下手方宜し七金左ならば二飛ト引 八飛の時七銀となりて指す方宜し

(變化) 冬 六歩の處六歩二飛五歩同銀七歩六歩同歩八歩八王九銀七歩九歩にて指す宜し
(變化) 秋 八金の處五歩四銀六金七銀同金六角七銀五角八金六歩同歩同角同銀同飛にて

下手方宜し

下手方一五まで歩を突き置くこと宜し、九九歩成り銀にて取りし後ち八六銀と掛る手宜し
飛八五に至り七六と金上るとき七七銀をなりて飛を捨てる面白し、然れども下手方の圍
ひ弱り上手方より飛を打たれ殆んど見れば見合して飛を引き銀を成り徐ろに攻め入るの方
略を定むると肝要なりとす

下手方の前に云ふ所を深く考へて自ら圍み弱さを悟らぬ則ち其勢力を張大にするの計を
回らざるべからず、若し其勢力を張大よして一手の一手より自己の駒と駒とを緊切に關

聯し盤上に黒雲を畫き狂瀾を起し怒鱗を描き噴火を發する底の一大快腕を揮ふて敵地に攻
め入らば上手方の敗となると明らげし

總して下手方の駒立の動もすれば衆駒の膠離潰裂するを免れざるものなるを以て、之を緊
切に指し行き一の駒の働きを衆駒の勢ひに合せしめ以て一齋雄揮の動作あるを要す然らざ
れば則ち盤上の濁浪を掀翻し來る時に當りて大いに狼狽措畫爲す所を知らざるの醜狀を現
のすに至らんとす、豈は深く顧ふ所なかるべけんや此定石下手方が初めに一五まで歩を突
き置き其中頃に至りて飛を捨る手の前後照應して最も幹旋の細かに到れるを見るなり、凡
そ圍碁の巧手段を工夫する所の此の如き所にあるものなれば初學者之を輕々に觀過すべか
らず

八六歩突
く手の後
しに至り悪

九六歩突
き取らせ
置く手妙
なり

第四圖

四枚落變化其四

香	桂	銀	王	香	桂	香
	飛				角	
		歩	歩	歩	歩	歩
					歩	
	銀					
		歩	歩			
	金	銀	歩	歩	歩	歩
			金			
	桂		王		銀	桂

(説明) 八金四歩六歩四歩七金二銀八銀三銀六歩七銀七銀九歩六歩五歩八金五歩八歩
六歩同歩五銀

(後手) 八歩六銀同金同香七歩同香同桂九飛九香八歩同香七金にて下手方宜し

(變化) 香同歩の處七金四歩六歩八歩同銀五歩五歩同角六金三角八王六歩五歩四角六歩二
飛七金五銀同金同飛六銀二飛七王七金にて下手方宜し且つ桂頭へ歩付の手あれども此處
にて金をなり此末角の切宜し七王の手七王ならば五金の打にて宜し同銀の手同金ならば
八歩と打つ宜し

(變化) 〇同桂の處同歩同桂八歩七桂同銀五桂六銀七桂同金五歩打にて下手方宜し

下手方九九香に對し九八歩と打ち香を上げ置くに宜し、最後に至り八七金と打つ是れにて
勝ちなり上手方の既に防禦の術を下手方より飛角俱に攻め來らるゝの怖れあり、然れども
成るべく飛の九八香を根據と爲して防ぎ角の七七銀を根據と爲して防くの策を盡すべし
前云ふ所の下手方が最後に至り八七金と打つ手の幾んど博浪一槌屬鏝一劍するが如きの
妙あり、上手方の下手方の挾彈袖劍に心付さるゝあらずと雖も亦た其陰隱の心術を巧みに

防禦する能はざる所以のもの即ち是れ上手方の初めより抜手あるに由るものなり、下手方の上手方の抜手あるに乗して適當の駒立を爲せし眼力の實に其非凡なるを見る足れり

然れども上手方の抜手あるもの如く見ゆるもの必ずしも抜手ならず、下手方の之を侮りて疎放の動作あるべからず然らざれば簡勁峭峻の氣力と手段とを以て上手方の下手方を蹂躪せんと試むるに至るべし、故に下手方の周到遺す所なきの用意を以て上手方の抜手あるに乗じて彼を攻め以て彼れを破り彼れをして扞然反抗せしむる所なきを要するなり

○ 二枚落定石規箴

四金 同歩此時上手より角打所なし下手方三桂の頭へ歩打つ手にて勝なり
總して二枚落の歩を捨て金銀を遠ざくることを工風すべし

六歩の突 同歩と取れば角道塞り始終指悪し何時にても六歩の突き大方角にて取るべし上手の飛角の道塞ぐ様に指す故能々考へ飛角の筋遁る様に心掛くべし工夫せざれば後に大に差支ゆるなり能々味ふべし

五歩 四金 同飛 二銀 打 此の如くに成れば桂香上手方にて取れば下手指し悪くし七歩打たず六銀上る手習なり能工夫すべし

三銀 七歩 四歩 此の四歩の飛を七飛と廻はさん爲めなり若し飛の道塞げば六銀と上らん爲めなり
落方王を右へ行の駒を組ん爲め計りなり、右七歩と突く味方金と銀と替る宜し

七角の引き急ぐべし敵の王の片付に付込み歩の進み肝要なり味方王の圍ひを急いで必す負となるなり工夫すべし、極意の落され方初の中味方王圍ひ急が先角道盤面の四方残りす開き自由働く様にすれば自然と勝になるなり初め飛の仕掛をバ急がぬ方宜し是れ極秘なり、又味方の角道を皆な開いて後ち飛仕掛の二の筋と八筋と仕掛け敵是れを請る時駒片寄るものなり此の時七か三かの筋より歩を取り替へて三の末の歩打つて勝なり

色々手ありと雖も飛角落の初五四歩を切バ悪なり
敵の模様を見隙を伺て味方の右六三へ銀を入れ替る様にするを肝要扱敵より八五銀上るとさの四々を突く手あるなり

下手方六
三の金上
る手よし

一二の香
上の手角
の進退を
守る手段
にて習ひ
わり

第五圖

二枚落其壹

香	桂		香			桂	香
		王	飛		銀	角	香
歩	歩	歩	歩	歩	金		歩
			歩	歩		歩	
			歩	歩	王		歩
歩	歩	歩	歩	銀			
			歩	銀			
香	桂		金			桂	香

下手方手傳組

角落將棋二九飛のとき七二飛と受る手の悪し又八五桂のとき三五歩と突く手の極めて拙なりと古人福島順棋の説なり

上手方より四四六六などへ金銀を乗來る時下手方より四六六四などへ金銀を乗受るの悪し唯だ歩を進むるを宜しとす、歩を進むるの締りなきに似て反つて利あり

●第五圖(説明) 八銀四歩、五歩、六歩、八金五歩、七金四歩、六金五歩、五金四歩、三金六歩、二銀六歩、一銀七歩、二香六歩、四王四銀、三金、二銀、四歩、二飛、七王、二王、二王、二王、二香、六歩

(後手) 四歩、七歩、八金、五歩、七桂、六歩、五歩、七歩、七歩、同銀、六歩、打八銀、二金、六歩、五歩、同歩、同飛、六歩、五歩、四歩、同歩、五歩、八歩、同王、五歩、打にて下手方宜し

(變化) 香八銀の處四歩、同歩、六銀、七歩、八銀、七桂、九銀、六金、六歩、五歩、同歩、同飛、五歩、五飛、八銀、三銀、引七歩、打七飛にて下手方指す宜し此多傳の趣意強て指示よて勝と云ふ指方にあらず能此意味を思ひ考あるべし

(變化) 夏同銀の處同金六歩、四歩、七歩、二歩、八と、同銀九角、二と、同金七桂、七歩、打にて下手方指す宜し

七六步と下手方打ち銀八八へ下げると妙なり、飛を五四へ引くも亦妙と云ふへし三八拾七歩を爲し王の下るを覗ふ手段の一とす飛角の路を以て相手を困しめ破るの手段最も多し、然れども三四の金油断すべからず上手方三四金の一つの根據となり防禦攻略共に強みあるものとす

情々此兩駒立を視るに犄犄の勢ひありて、雌雄の孰れに決するか未だ容易に知るべからざる状況なりと雖も下手方の其謀を細かにし其機を密かにして大舉上手方の領内に向ひ土を捲きて入らんとするものなれば、假令上手方が下手方の佚さを以て勞れたるを待つも亦た迂計と云ふべきのみ

之を以て上手方の若し能く陰に據て陽を奪ひ險を以て易を攻むるの手を指し始むるに至らんも亦た未だ知るべからず、果して此の如き場合に下手方の敵を邀ひ欺きて打返す手段を施すべし蓋し退くは是れ進むの機にして進むは是れ退くの策なり、攻守の機策も亦た是れと同じ進退攻守其機策巧みにするを棋道の秘訣と知るべきなり

五二の飛
勝負の決
する所着
眼すると
肝要なり

第 六 圖

二 其 化 變 落 枚 二

香	桂		王			桂	香
			王	飛	銀		
歩	歩	歩	王			歩	歩
			銀		金		
				歩	歩		
歩	歩	歩		銀	王	歩	歩
香	桂		金			桂	香

(説明) 八銀四歩五歩六歩七歩八金五歩七金四歩六金五金四金五金六金七銀六銀八銀五銀四王六銀
 四金三銀六歩二飛七王二王

(後手) 六歩二七五二香六歩四七歩八金七歩夏六歩五歩同歩五飛春六歩四飛五金三桂にて
 下手方宜し

(變化) 春六歩打の處七桂七歩△七金七歩○同銀七歩打にて下手方宜し

(變化) ○同銀の處同桂六歩同金七歩五歩八金七歩よて下手方宜し

(變化) △七金の處五歩七歩同銀八歩九歩二飛八王五歩打にて下手方宜し

(變化) 夏六歩の處五歩五歩同歩同角七桂六歩打四銀六歩にて下手方宜し

三三桂上るの手の角の路を塞ぐの妙ならざるのみならず、七六歩と突き切りざる故に面白
 味脚さを感じ只桂よりて相手方を破るの方略を定むるを要す、上手方も亦桂を三七へ
 上りて是れに應じ防禦の術を計るの手もわりと知るべし下手方亦た此に顧みる所なくんば
 ある可からず

要するに下手方の指手の滑澤圓柔なる上手方の指手よ劣ると數等たり、然らば則ち下手方

下手方五
 二の金上
 る手左右
 共に変化
 至り変化
 の違ひあ
 り心すべ
 し

第七圖

二枚落變化其三

香	桂					桂	香
		王	金	飛		銀	角
			金				
			銀	歩		金	
		歩	歩		歩		
				歩		歩	
		歩	歩	銀	王	桂	
		歩	銀				
香	桂						香

三七の桂
 上る手強
 みあり

の相手方の駒中、踏踏し時に奇手を出して以て劫掠を恣にする所なかるべからず
 凡そ棋道の病ひの設手の弊多に過ぎ、佈局夸大に失し、考案精醇ならず、貫聯周緻ならざるに
 り、此定石下手方の如きは即ち然りとす、若し夫れ其病ひを癒せんとせば、則ち大の冗なる
 のを失ふも少の緊なるものを保ち、所謂狐腋の千羊に優るものなることを知らざるべからず、
 依樣故蘆發明するの眼力を以て能く、圍碁の理趣得失を講究せよ、能く圍碁の理趣得失を講究
 するに精を錘め、細を極め、駒の運用自在なるを得るに至らば、則ち如何なる名人上手の巧手
 に對するも亦た毫も恐るゝとなかるべきなり

●第七圖(説明) 八銀三歩、五歩、六歩、八金、五歩、七金、四歩、六金、二金、左、五金、六金、七銀、二銀、六銀、三
 銀、四王、六銀、三金、二銀、六歩、二飛、七王、二六王、二六歩、二七王、二五歩、二香、六歩、七歩、七桂、七歩、四歩、二金、夏、七金
 (後手) 三桂、六歩、五歩、同歩、同飛、六歩、四飛、四歩、同歩、六銀、三銀、春、四歩、打、同歩、同銀、四飛、四歩、同銀
 同銀、同角、同金、同飛、五銀、打、一飛、引、にて下手方宜し、且上手方歩切故、五銀の手、四銀ならば、八銀
 と打べし
 (變化) 春、五歩、打の處、七銀、四飛、五歩、五歩、同銀、三桂、ト、にて下手方宜し

(變化) 夏、八金の處、八金、三桂、六銀、五歩、七金、五歩、同金、五歩、七金、五飛、四歩、同歩、五歩、打、三銀、引、に
 て下手方宜し

(變化) 〇、五歩、打の處、六八歩、三銀、五歩、六歩、六歩、七飛、七金、四歩、同銀、三桂、ト、にて下手方宜し、若
 し上手方、七金、七歩、不奇に捨置くとさき、七飛と浮手あり
 四六銀の時、下手方五三の銀を引く手妙なり、而して上手方四四歩、打つに、始り銀の取り換へ
 より角を捨て金を飛にて取り四五に歩を上手方より付けし時、四一飛を引く迄、双方挑み合ひ
 て盡したりと云ふべし、上手方に角われ、其意を心得て相手方の勢、援抄きに乘じ、飛先を衝
 くの策を施すこと亦た是れ一の秘手段なり

然れども若し下手方に於て緩慢なる所あらんか、上手方の必ず翼を張り、驛を放ち、盤上に雄
 飛するを、知り得べきのみ、下手方の深く此に注意して、自己の駒と駒とを離睽せしめ、衆駒融
 溶して勝を占むるを計るべきなり、衆駒融溶し一齊の動作あらしむるの一、手、一、手、悉く
 皆な緊切に指さるべからず、手の臂を揺かし腕の力を役する理を以て深く考へ見なば、則
 ち衆駒の融溶する所以の亦實に一手も其苟も指さるに由るなり、豈に深く思所なうるべけん

下手方四
二の銀上
り行手も
意味あり
と雖も考
べし

第八圖

二枚落變化其四

星	科		雫		雫		科	星
			王	飛			角	
			雫				歩	
			雫			金		
			歩					
			歩			歩		
			歩			王		
			歩			銀		
			歩					
			歩			銀		
			歩			金		
			桂					
			香					

(説明) 八金四歩六歩七金五歩六金四歩五歩香五金二飛八銀三銀七銀六銀八銀二銀四王三
銀四金六歩四銀七王二王但し一番の指方と此末同様の心得にて下手方宜し

(變化) 春 五金の處八銀五金七銀六金八王二銀八銀五銀六歩四銀五歩同歩同金二飛四歩六
王七王二王六歩二銀五歩四歩三金二香三歩同角同金同銀此末四銀と上りて三飛と振る上
手方歩切故下手方宜し且二王の手五歩七王八歩打にても宜し然れども居王故に非力にて
の危し初心の方に本文之通りに王を圍ひ指方宜し

下手方三八歩と打つとき王よて取らせて五五歩付け飛先を破ぶるは是れ必勝の手なり、
故に上手方も三八歩の措きて他に下手方の飛先を防禦するの策を定むる方宜しとす

前に云ふ下手方の手段の一個の膨脹力にして上手方の對策の一個の壓縮力たり、此二
個の力の實に盤上と凝結して暗騰たる一團の殺氣となり或の浮沈し或の淡濃し動もすれバ
杆格衝突せんとするの状況あり而して上手方の駒立の下手方の駒立に比すれば遙かに劣れ

るものあるを以て、如何に上手方の下手方を扼せんと欲するも亦た下手方の上手方又對し
滔天捲地の勢ひを以て攻込むを如何せんや

夫れ然り然れども若し上手方に於て距を抜き鉤を伸べ強梁多力にして下手方に向へ來らば下手方の之が對拒手段なりるべうらず、然らば則ち其手段の如何すべきか曰く他なし唯我陣堅固又備へて敵の疲挫するを待つべきのみ敵方にして少しく疲挫す是れ我吶喊して彼を攻むべきの時到来的ものなり、我れ何ぞ猶豫すべけんや勇往直前して彼れの陣を破り彼を攻め亡すべきなり

五五の歩
突く手面
白けれ共
考べし

第九圖

二枚落變化其五

香	桂		金	王	銀	桂	香
			飛			角	
歩	歩			歩	歩	歩	歩
		歩	銀		歩		
			歩	歩			
				金	銀		
歩	歩	歩	歩		歩	歩	歩
			銀				
香	桂		金	王		桂	香

二枚落變化其五

四十一

其間堂藏版

(説明) 八金四歩、六歩、四歩、七金、五歩、五歩、六飛、五金、七歩、四銀、七銀、七銀、八銀、四銀、六銀
(後手) 五金、七銀、四銀、八王、三銀、四銀、四銀、同銀、同角、六銀、二角、打、五銀、八銀、打、にて、下手方指す宜し
且つ二枚落のとき、如此、金銀を替りて桂頭へ打て、上手方の桂香を取ると肝要なり、四銀打にて下手方宜し

(變化) 六銀の處、六歩、四銀、六歩、同銀、同金、同飛、六銀、二飛、五歩、打、八金、六銀、六金にて、下手方宜し

(變化) △六銀打の處、六銀、打、二飛、五歩、打、七金にて、下手方宜し、此處にて、下手方歩徳をするべし、上手方歩切にて、必ず困るなり

上手方四五の銀上る手角先を窺ふの意、あれども八八銀と下手方打ちて桂香を取り、是れを利用して、用手法を破るの方略、最も宜し、如斯の駒立に至れば、上手方防禦の術も亦立たざるものなり

之を要するに、上手方の駒立の陰窟の底に、没し寂々寥々として、更に一點の火氣なきが如し、下手方能く上手方の駒立を見て、其指す所敵の先手々々に出で、盤上に火焰を吐き、鬼腕を揮ふ

快事あるを要す

夫れ然り、上手方の駒立の、實に陰窟の底に没して、一點の火氣なきに似たれども、亦た其中に一大基理を、拆くべき、鋭刃を揮ふて起んとする勢ひなきは、あらず、然らば、則ち下手方の上手方に對すると、最も注意苦心して、指手、鋭利盤上に、縦横する所あるべきのみ、若し或の緩漫姑息なる所、あらんか、強者弱者と、變じ、勝勢敗色と、換ると、唯だ反掌の裡に、あり、豈又大いに戒慎する所なくして、可ならんや

總して、圍碁の勝敗の奇機、一髮間を容さる裡にあるものなれば、則ち奇正變化、端睨し得べからざる底の、快活手段を以てせし、強敵と雖ども、亦た何の怯るゝ所あるべけんや、乞ふ深く考察せよ

○飛香車落定石規箴

總して、飛香車落の角替て、上手の方悪しと知るへし、下手の方より、八角と打つ手も、良し併し、香車にて、理あり

七角と上らず、指すこと、上手の方角替るを、嫌ひて、なり、七角上る然る時、三角引に及んず、九歩

九歩八歩 同歩と突き飛車にて端の歩を取廻し九飛と引八飛と歸る事定跡なり後に五桂にて良し

此將基上手の方より飛先へ金銀を上り請ることあり尤も止るなり下手より是を破らんとすれば負るものなり上手へ飛先強く請けさせ弱き方へ飛を廻し破るべし

此駒組の上より三金と上りたる指方なり下手方六歩 同歩 同飛と突替り八歩打心得あるべし

一飛の引面白し總て端を指すとき此指方宜し歩二つあれば最初一飛と行かず五歩 同歩 四歩と打へし歩切れ故此の如くに成るなり能々工風すべし

上手の方より飛先へ金銀を上り請る事尤も止まるなり下手より是を破らんとすれば負るものなり、上手へ飛先強く受けさせ弱方へ飛を廻し破るべし

伊藤看壽嘗て曰く飛香落に向ふに即ち二枚落の對手心持なるべしと此説一理あり、然るに保原加茂左衛門の云ふ所に依れば飛香落に三筋引角にて向ふこと最も利ありと是れも亦た一理あるに似たり、然らば則ち此二説を折衷して以て其場合の宜しきに投することを

下手方七
二の銀運
用するに
意を注ぐ
と肝要也

九八の歩
に活動の
妙あり

第十圖

一 其 落 香 飛

香	桂	銀	王	金	桂	香
飛		銀		金	角	
		歩	歩	歩	歩	
	歩					歩
		歩	歩	歩		
歩	歩	銀		歩	歩	
歩	角	金		歩	王	
	桂			金		香

主眼とすべし

九四飛八八金五五步五七銀の指順にて若し八五桂のとき七五步同角七六銀九七桂成るの指順なれば下手方の必ず上手方に勝つべきなり、而して此の如き駒立ならば飛香落の定石よ能く契へたるものにして敗を轉して全きと爲し危きを回らして安しと爲し、九天九地の窮極なきが如きの妙手是れより自から生じ來るものなりと福島順基の説なり

●第十圖(説明)

六步四步六步九步七金九步八銀九步同歩同飛七步九飛五步七銀
八王二金八王四步六步四步夏八銀八步打

(後手) 七銀九桂六步八步同歩同桂七金八步同金九步同角七桂五步九桂七角八飛五步七桂打 五金八步打にて下手方指す宜し

(變化) 春 同歩の處七金八步同金八飛七步八桂九步九角七步打にて下手方宜し

(變化) 夏 八銀の處五步九飛六銀六步八步九步同角八步打にて下手方宜し此の指方の田中氏の初心に教示せらるる處にして初心の者には甚だ指善し

九三桂と飛びて八五にて歩を取り金を八六へ誘ひ九九步成りて又角を逃げ破られんことを

計る上手方金を七五へ上りて先つ飛先を頼り下手方八六步打ち徐々に中より衝き破るの方略至當の手なりとす

前の下手方の手を觀察するも、其一手一手と指し來り指し去る所悉く皆な呼應して善し殊に下方手八六步打つし手の積陰凝結するの所怒雷一聲忽ち之を開くの心地せらる、碁伎の老腕なる者にあらざれば則ち此の切き巧手段を施すを得ざるなり

蓋し碁伎の勝敗を争ふに能く攻守進退の規律に契へ運用自在變化窮まりなきこと前の定石の如きもの百千萬番の中に於て白眉と稱すべきものなり、若し試みに此定石の基理を咀嚼消化して別に敵と相對し腕を振して睥睨叱咤するあらば、則ち龍顛虎倒の強力を顯はすに至るや必せり

然りと雖ども此定石に唯だ拘泥するのみなれば則ち碁手の上達せんことを望むべからず、故に此定石に據て更に基理を發揮し遺詣する所あるを肝要とす特に附言して初學者の注意を引くこと爾り

下手方上
九三の桂
上る手后
に機を計
るの路也

第十壹圖

飛香落變化其二

香	桂	銀	王	香	桂	香
	角					
香	香	香	香	香	香	香
	香	香		香		
	步	步	步			
步	金	桂	銀	步	步	步
	角					
				王	金	銀
					桂	香

(説明) 七歩 三歩 六歩 九歩 七金 九歩 八歩 八歩 四歩 八歩 七金 七銀 八銀 三銀 七銀 七桂 九桂
 六歩 四歩 六歩 四歩 八金 五歩 六歩 四歩 七金 二銀 八銀 三銀 七銀 四銀 七桂 三桂

(後手) 五歩 五歩 同歩 同桂 六歩 七桂 同角 六歩 九角 七歩 同金 同香 同角 七金 打 七角 七金にて下手方宜し

(變化) 香 七桂の處 七角 五歩 同歩 九歩 同歩 八銀 八歩 九銀 同金 同香 七歩 同香 同桂 八金 打にて下手方宜し 且つ上手方 八歩と突くとさの下手方此の如く指す心得るなり

八五桂上りて九七を成り角を誘ひ而して香にて取らずして角頭へ歩を打つこと妙なり角引くを待ちて歩成る是れ大に深意あり上手方七七の桂われ下手方より九二飛を廻るの手を鑑へ角金の利用を全からしむることを努むべし

此駒組の双方共幾んど龍驤虎嘯 盤上響 應帶甲百 萬橫行縱馳するものに似たるあり、下手方の角引くを待ちて歩成るの手是れ深沈大略稱揚すべきなり宜なる哉其後に至りて鋒矛の向ふ所能く敵陣を破る能く學ぶもの宜しく之を以て軌範と爲すべし

前に云ふか如く此定石の、双方共に銜虚浮誇の指手整齊して經營する所の意氣の盤面に透るの趣き然れども簡潔なるべき所にして反つて繁縟に過ぎたる所も亦たなき非らず、此

れ等の所の錯置少しく跌づきて自つから然るを致せしものなり然るに能く眼底の山河長へに存する悲惨の光景を遺さず、互に正々堂々として勝敗を争ふの状の亦た是れ驍強の基家にして之を稱せん

夫れ然れども此定石の形勢も依れば下手方巧に上手方の下手方の計略に乗り敗を取るべし故に下手方の上手方の動静を偵察して此手段を施すべきなり

●第十二圖(説明) 七歩四歩六歩九歩八金五歩七金九飛六金八歩五歩

(後手)五歩同金六歩同歩同飛七歩六飛八金八歩打七歩六飛にて下手方宜し且つ八金の手の悪手なれども初心の惑を持って知るべし飛香落下手方の指方品々あれども精選に譲りて略す角換の指方の飛車落の部に出す

下手方相手の備へ如何に依り八五の歩を打ち金を上げて九六に飛を進め轉して六六へ廻ること妙なり然れども斯の如き手段の角筋に守衛の駒なく上手方の手より飛を角にて取るも却つて下手方の角を解くこと 能いざるの傷みあるに乘し攻め掛るの手段なりと考ふべし

八六へ金
上る手過
ちあり心
すべきもの
なり

上手方端
に手あり
其の機を
察すべし

第十貳圖

飛香落變化其三

香	桂	銀	王	銀	桂	香
飛					角	
		歩	歩	歩	歩	
	歩			歩		
歩		歩				
	金		歩			
歩	歩		歩	歩	歩	歩
	角					
	桂	銀	王	金	銀	桂

要するに此上手方の駒組の回山倒海の勢ひあるにも拘りらず、制を熾熾に受るの観あり其此の如くなる所以のもの下手方の指手能く規矩に合へて苟くもせざるに由る、殊に下手方が上手方の覬覦を剪除せんと努むるの手の最も深密の用意なりと云ふへし

○飛車落定石規箴

上手より敵の王先を急に指さば六歩と突き高梅も組むべし尸木の上手の方色々手あり飛車落の四筋吉と心得べきなり

四歩同桂同銀同桂四銀と引く手あるなり夫故四銀と取るなり組て飛車落角行落等に此類多し能々考へ指すべし

四歩の時七歩打たず六歩と上手打手あり力無くて下手方指悪し
八銀打四角九銀八金九銀同王七金打下手方宜し但し此駒組は力ある人考へ指すべし此指方
上手の好まざる義なり

八王習なき故悪し飛車落すとき四八の王苦しからる苟にも角落に四八の王と限るの習事なり

飛車落の四八の王良し

八六の歩悪し急かぬ事なり先七王と退き其後二八の王と片付へきなり

三五の歩の取て又打が良し王の近き所破れぬ様にすべし勝負の此處あり

八金よりの三銀なる五銀同角同銀五の金と指すこと宜し

六桂行の悪し打の勝になるなり六王五銀七王三の桂成て勝なり斯様の所の桂飛べの手前の罪あるものなり桂一枚捨てし置けば罪遠きものなり所に依るべし

飛車落駒立橋も構ふ五八金とありて其端に手なき故金の離れを見合せんが爲めなり

四筋の飛車落の四五歩突くこと大抵宜しきものなり、又其落し方より五三銀上らせして二三角引き六五銀の手あれば是れ定跡あるが故に落され方の之を受るに能く考へて迂濶の手を施すべからずと古人福島順基の云へり

五四歩四八飛三三金三六歩の指順よて三三桂を落し方上らざるべき四五に歩あり、總して八一飛六八角三角四六歩の順に指し行かば落され方の必ず勝つべし

下手方五
七角の打
手よし

六五の銀
進む手遅
速の度お
り考ふべ
し

第十參圖

飛車落其壹

香	桂		王	銀	桂	香
	飛					
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
			歩		歩	
		歩	歩			
歩	歩		銀	歩	歩	歩
		金				
香	桂		王	金	銀	桂

(説明) 七歩四歩六歩四歩八金二銀八銀三銀七銀四銀六歩五歩同歩八角同金七角打七金五銀四歩打

(後手) 六歩打八銀五角三歩五と五銀二歩打香 同金七角五金三角七歩打にて下手方宜し

(變化) 香 同金の處七金五角二銀 同金四銀打四角二角六飛四角 同歩六王四角打にても下手方面白し

下手方歩を六六へ打ち銀を退け後に歩を利用す是れ一舉兩得の策とす斯くて後け五七歩と打ち王の中堅を衝くの妙なり上手方又五三のるれば是も等閑すべからず
下手方五七歩の手一たび風雨の機會を得て恰も炬を闇室に掲るが如く能く萬人をして刮目壁を合して羊を牽かしめざるのなきが如き觀わらしむ、棋道の妙手宜しく此の如くならざるべからず

下手方六六の銀取り替る手よし

三三へる引く方意味深長

第 十 四 圖

飛車落變化其貳

星	科		王	王	銀	科	星
	飛						
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
		歩	歩				
		桂	銀		歩	歩	歩
		金					
香				王	金	銀	桂

(説明) 六歩四歩六歩六歩八歩七歩八歩六歩八歩六歩銀六歩銀六歩銀七歩銀五歩銀五歩同歩八歩同歩七角打八歩銀七桂六銀同銀同角七銀三

(後手) 六歩五歩八歩四歩八歩五歩四歩八歩四歩七歩五歩八歩六歩四歩五歩七歩八歩同歩同歩七歩八歩四歩三歩五歩四歩二歩一歩同歩同歩五歩同歩五歩二歩銀打にて下手方宜し且つ七銀の處又四角ならば三歩金の上るべし五角ならば五歩と突くべし四銀ならば八歩と打べし

(變化) 七桂の處五角二歩六歩七歩七桂四銀六角二歩此末六歩を取りに行く趣向下手方大に宜し

(變化) 七桂の處八銀四角七桂四銀八金三歩七銀二歩六歩四歩金打みて下手方成る故指し善し

下手方敵の飛先きを攻め掛けて歩を切り置き三三のるを以て機を變し敵方の王未だ二八に至らざるに先だち銀を打ち端の不意に懸くこと甚だ面白し上手方兩方の受手の方略の全く手抜けなり努むべし

虎視狼顧互に相呑噬し盤上を横領し去らんと欲するの状あり、然れども其遂に上手方の敗

色を顯しよくのすよ至いたるもの蓋けだし其指手そのさしてに未いまだ心力しんりよくを竭つくさしりし所ところあるが故ゆゑに、下手方へたがたより太はなはだしく攻路かうりやくを受うくるに至いたれるものなり

然しからば則すなはち上手方じやうほうの敗色はいしよくを顯あらはすに至いたりし原因げんいん如何いかんを探究たんきやうし以もつて爬羅剔抉はりらてきけつ基理きりの幽光微明ゆうくわいみを闡發くわんぱつすることの某伎まきぎを攻習かうしゆするに最もつも肝要かんやうなるにわらざる乎か、世よの某伎まきぎを學まなぶもの斯か種の定石ていせきに據よつて委苦曲辛いくきよくしんみかま水窮すいきゆうまりて雲出くもいづるの妙手めうしゆを養殖ようしよくすること實じつに忽ゆるかせにすべからざるなり

下手方へたがた若わかし此かくの如ごとく爲なさんにの既すでに枯木死灰こぼくしゐ氷然冷然ひやうぜんれいぜん一滴てきの熱血ねつけつをも存ぞんせざるが如ごときの上じやう手方てがたの唯ただ一敗地ばいちに塗ぬれ去さるべきの燎れうとして明あやかなり

●第十五圖(説明) 六七歩 四歩 六歩 四歩 八金 二銀 六銀 七銀 四銀 五銀 六歩 五歩 同歩 八角 同金 七角 打夏 四歩 九角 七角 打

(後手) 二飛 一角 四飛 八金 九香 六歩 三銀 五香 同銀 同歩 同飛 にて下手方指す宜し

(變化) 香 六歩の處 五歩 同銀 五香 六歩 四香 七歩 七王 六銀 にて下手方指宜し

(變化) 夏 四歩の處 七角 七角 八金 九角 一角 五銀 六香 同銀 同香 六歩 五歩 四桂 七角 六歩 八銀 五

五七角と
打とさし
手方六四
歩と突く
手の考ふ
べし

圖五十第

三 其 化 變 落 車 飛

香	桂		王	銀	桂	香
	飛					
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
		歩	銀			
歩	歩	角	銀	歩	歩	歩
	金					
香	桂	と	王	金	銀	桂

七九角成
る手よし

香五歩二飛よて下手方宜し且六香の手六歩ならば五銀にて宜し
 雙方共にるの入り込みあれども下手方外に飛の應援あり上手方六六歩と打ちて飛を禦ぐ
 は堅しと雖ども下手方にて飛を八五へ廻し角の内助により或は香を利用して破ること容易
 なり併し上手方へ故なく香を渡すことは深く戒むべきものとす
 盤上断沸雲蒸龍起の觀あり下手方の飛の角と渾融して敵を攻略せんとするに心力を竭すと
 頗る巧手段と謂ふへし、此巧手段を以て敵を攻む如何なる強敵と雖ども亦た豈に敗色を取
 らざらんや

蓋し此の定石上手方の勢と沈晦なる所ありと雖ども亦た其中に奇手活躍の所なきにあ
 らず、然らば則ち其沈晦なる所あるもの畢竟するに下手方を翻弄するものにあらざるな
 きを得んや、焉んぞ知らん下手方よ於て一手漫放することあらば則ち上手方は暗啞叱叱し
 て風雲を蹴り來りて以て大いに下手方を苦腦せしむべきと豈に深く此に警むる所なかる
 へけんや

既に前に云ふが如く下手方は翻弄さるゝは則ち阻格さるゝものなり、既に阻格さるゝと雖

ども矯々たる手段を以て倍蓰の勢を鼓し前住せば下手方よ勝算なしとすべけんや

●第十六圖(説明) 七歩四歩六歩四歩八金二銀六銀七銀四銀六歩五歩同歩八角 同金九
 角打七桂九角八金九角八角四歩八王五歩

(後手) 九金 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩
 一金 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩 同歩

(變化) 春 五角の處 六角打七歩一角八歩よて下手方指宜し

(變化) 夏 同銀の處 七銀九金 同王七角九王四銀八金右 五銀八銀四角七歩七歩 同金七歩打に
 て下手方宜し

(變化) 秋 八金打の處 八銀八角八金打七王 同王五銀にて下手方宜し且つ五金の手五金なら
 ば八角ト成べし又八角の處 六角ト上手方指すときハ下手方宜しからず此意味肝要なり

上手方の七九金と下るとき角を捨て金を取り後ちに六六歩と銀の頭へ付け銀を上げる手共
 に是れ守りの駒を弱むるの手段にして敵の王を單獨ならしむるの妙策なり而して下手方ハ
 上手方五三にるゝる故未だ方略を施すも餘手なき間に勝利を占むることを計るを宜しとす

八九多よ
る手意味
深し

八五の突
き歩の緩
急あり

圖六十第

四 其 化 變 落 車 飛

皇	科		王	王	飛	科	皇
	飛						
歩		歩	歩	歩		歩	歩
			飛		歩		
	歩		歩				
歩	歩	桂	銀	歩	歩	歩	歩
	角	金	王				
香	香			金	銀	桂	香

智計を以て智計を伐ち謀略を以て謀略を攻めば則ち智計謀略共に施すべきものなきが如し
 然れども其智計謀略の優劣如何も論なく聊か指手に緩漫なる所あらば則ち隙を窺ひて弱
 みを顯し敗を取る亦た止を得ざるなり、下手方能く之を省みて上手方の指手に緊切なる
 手段を施さずんばあるべからず
 之を要するに下手方が敵を受ける心得り、敵の弱き方を速ひて其強き方を守るの駒立を成し
 敵の應し來るときの徐ろに其守りし方と邀ひし方と相合して以て其敵を夾み窘ましむる所
 あるべし、敵若し我れに應せずんば則ち攻守ニツながら慎重にして輕々其施すところ
 からず

る八四へ
引く手よ

第七十圖

飛車落變化其五

香	桂	銀	金	王	銀	桂	香
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	桂	銀	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
桂	飛						
角	桂						

下手方飛
の掛り方
よ意を用
ひて勝也

(説明)

四八角

六歩四歩六歩四歩八金二銀六銀三銀七銀四銀五歩五歩同歩八角同金七角打八角打

(後手)夏七桂二飛六角二金四銀四歩春八金五歩八角七歩七銀三桂にて下手方宜し

(變化)春七金の處六歩一四王八金二金五王五銀同桂同飛六歩二飛八銀三王八金四歩九歩三

金右六歩三桂にて下手方宜し

(變化)夏七桂の處七角二銀六歩六飛七金三銀八角四金四銀七歩九歩四歩八金八金七銀七

金七桂四金六歩三桂九銀一四王八三王二王六歩四歩六歩七歩七銀四る六歩四歩七桂五歩突に

て下手方宜し

下手方八四引く勝の手とす上手方四六角を出せしとき歩を突き出して之を退け七三桂
飛びて攻め掛るの手段能く盡せり上手方五八金上り又全力を極めて禦ぐの策を定めずんば
決して勝つべからず下手方何ぞ闇雲摸倣して可ならんや

此駒立紛々擾々として鱗と獅と争ひ鳳と鷲と闘ひ其勝敗孰れに歸すへきか判定し得へから
ざるものあり、然れども上手方の駒組に比すれば下手方の駒立鞏固ならず故に其指手を緊

様も指す定跡なり此定法の予關東在府の節師匠天野宗歩先生が十二世大橋宗桂宗道の嫡男にして大橋宗金に教示せらるゝを傍觀の傳記して初心の便りとす併し愚昧の暗記なれば其違否の知らず

熟々此定石を案ずるに五三の桂成るの手は策の宜しきを得たるものと云ふべからず、他に防禦し得べからざる手を鑑みて以て長久の方略を回らすことを最も肝要なりとす、之に反して下手方の指方の總じて宜し

其中にも六四歩六二銀六三銀五四銀六五歩と突き出して先地歩を作り、而して六二に飛を廻り六五歩と敵より突くを受るの手を銀にて受るは最も下手方の手段平凡ならざることを見るに足れり

古來の名人上手は這種の定石を稱して六五の早突きと云へり、而して此六五の早突きの平凡の手の如く蔑視するを常なりとす然れども是れ畢竟尋常の名人上手の指手なるが故に然く蔑視するものなるに外ならざるのみ若し夫れ其理の蘊奥を討究探赜し數十年間、千人萬人の名人上手と相對して碁を圍はし圍み盡し攻め盡し、手法手段を具し盡して、前

五二の金圍み堅し

第十圖

飛車落變化其七

香	桂	王	金	銀	香
歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩
香	桂	王	金	銀	香

七七金立

七三の桂し上手よ

此人なく後に此人なく天下の棋壇を獨歩獨行したる天野宗歩大人の別に一大機軸を出されたる六五早突きの此定石豈に尋常一様に観るべきものならんや、試みに余の云ふ所を知らんと欲せば乞ふ先仔細に眼を刮して看よ

●第十九圖(説明)

七歩 四歩 六歩 六歩 七歩 八歩 六歩 二銀 八銀 六銀 三銀 七銀 五銀 七金 二飛 六歩 夏 七歩 八金 四銀 一王 七銀 三王 九王 二金 八三 王 三桂

(後手) 七歩 同歩 六金 五銀 七金 四歩 六金 同飛 五歩 八角 八歩 八歩 七歩 九歩 九歩 にて下手方宜し若し七金の手を上手方外の手ならば 四銀も引て善し

(變化) 夏 七歩の處 五歩 同歩 同銀 六歩 同銀 同銀 同角 同金 七銀 打 八角 打 にては少し下手方六ヶ敷見ゆ此指方の將基指早指南に委し

下手方六五銀と歩の頭へ進む手宜し上手方の七五金を禦ぐの歩を支ふるは強味あるものなり且つ上手方六四の歩を取り金を捨てる手も面白し下手方も亦た最も細心精考して一手一手駒を盤上に飛動せしめ直ちに雲影を望み水盤を聞くの籌謀を施すへきを要す
此駒組双方共に變幻出沒端脱し易得からざるの妙あり、然れども下手方が上手方の七五金

下手方三六歩突く手面白し

二六銀の上り考ふべし

第十二圖

飛車落變化其八

皇	科	瀨				科	皇
	飛			王	王		
歩	歩	歩		歩	歩	歩	歩
			歩				
		歩				銀	歩
歩	歩		歩	歩	歩	歩	歩
	銀	金		王	金		
香	桂					桂	香

上手方角換

を防ぐの手の鱗を碎き甲を挫き進んで勝を趁ふものゝ如し何そ其快事なるや

●第二十圖(説明) 七歩四歩二角 同銀七金三銀八銀二五金右 八金四歩八銀三金六歩二王三銀
三王六歩四歩八王二金夏 六銀四銀

(後手) 七銀四歩六銀四歩六歩五歩七銀二銀五歩三銀五歩春 五歩四歩 同金七銀引 五歩打六
銀三銀上る にて下手方位勝故指克し

(變化) 春 五歩の處 同歩 同銀六歩 同歩八歩 同銀引六歩八歩四歩五歩五歩三歩九歩 同歩七歩
七桂六歩八歩打二銀引 此次の三香 同歩八歩 同香九角打の手ありて下手方指克し

(變化) 夏 六銀の處 六銀四歩五歩五歩 同銀五歩四歩打二銀引にて下手方指克し且 同銀の手
四歩ならび 同金にて指克し

下手方角換の差し込みに連れて相手方の備を亂し其虚に乗して角を利用せんことを計るも
のなれば下手方其要心を専らとす且下手方二四の銀狼りに取り換へ又は其位置を動かす可
からず

變幻出沒間を窺み隙を乗じて狡猾手段を施す所極めて妙なり、殊に下手方の大に警むべき

この既之を前云ひたれば今又茲又言ふの必要なしと雖ども其特に注意すへきは意氣
昂然として相手方に對し威震を張るゝあること是れなり、此の如くする時は上手方も亦た
必ず窘むに至るものなり

若し意外にも上手方が下手方を向ふて伴はり陥れんと欲する奇策を施す色あらば、下手
方の宜しく輕きを以て重きを受け正を以て奇を受くるが如く計るを要す、故に我駒は成る
べく遠きものと近きものと連絡疏通して守備を堅ふし敵をして一步も我領内に踏入らしむ
ることを得ざらしむることを主旨とすべし、而して敵少しく倦み疲るゝの状あらば其隙を
乘じて攻め始むべし
斯く攻め掛るゝ時の敵の如何とも爲すへきの計略なく敗を取らざらんとするも亦た得べか
らざるなり

下手方角の動きを肝要とす

七七の角上る手を大に變化をまどす

第二十二圖

一 其 (機車飛居方手下) 落車飛

香	桂		王	金	角	桂	香
	飛		銀				
歩		歩	歩	歩	銀	歩	歩
			歩				
	歩						
歩	歩	角	銀		歩	歩	歩
		金				王	
香	桂				金	銀	桂

(説明)

六七歩 四三歩 六六歩 四八歩 七五歩 七角 四歩 八銀 三銀 七銀 三角 六五歩 六銀 八王 三銀 八王

(後手)

六歩 同歩 同角 同角 同飛 七歩 二飛 八銀 五銀 七桂 四歩 六歩 四歩 九歩 四歩 八金 三金 七銀

四王春

六銀 三王 六三歩 二金 八歩 打てて 下手方宜し

(變化)

春 六銀の處 四歩 二王 六三歩 二金 五歩 三銀 夏 七金 五歩 同歩 〇 八角打にて 下手方指克し 但し 八角打の手を 八歩 同香 九角 六香 八角 八角打にて 下手方宜し ならず

(變化)

イ 六歩の處 六三歩 五歩にて 下手方の 三銀と上りて 指克し 此手段は 變化の部

よあり

(變化)

夏 七金の處 五七歩 四六歩 七銀 九角打 六銀引 八歩打にて 下手方指克し 且 六銀引の

手

七角打ならば 八歩打にて 宜し

(變化)

ホ 七銀の手を 六銀右ならば 八歩打てて 指克し

八八歩打ちて 相手を 試み 雙方に 角の 打ち込みを 計るに 手段を 盡すこと 到れり 盡せり 此の如き 駒組みの ときは 下手方 輕躁なる 方略を 回らさず 緩り 攻略を 定むるを 宜しとす 然らざれば 一敗地に 塗みるゝこと 必然なりと云ふ へし

要するに此駒組に就て視れば、上手方の旗堂々陣營肅々糧多く馬肥へ憐傭の士の謀は神の如く三軍の兵の壯氣は秋に横はり戦へば必ず勝ち攻れば必ず取るが如きの状あり、故に下手方は假令一手たりとも自己の衆駒と一和潭成せしめて以て勝利を計るべきなり

斯く衆駒一和潭融せしめて以て層々重々愈々出て慮々急々益々進みて益々鋭に其鋭手を敵方の牙營に肉薄せしめ、以て機に乗して大擧することあらば則ち其勢の到る所は遂に下手方の爲めに陥れられて終らんのみ下手方其れ此手段を取れ

●第二十二圖(説明)

七歩四歩六歩八歩七歩四歩五歩五歩二銀八銀一角七銀二銀五歩
 三銀八王八歩同歩同角秋同角同飛七歩二八飛七桂二五金右八金四歩八王七四金八銀四王七銀三銀
 (後手) 六歩四歩六歩九歩四歩三歩同歩二銀〇五歩一王四歩同歩八角三角同角同桂ト八角
 五角六銀右三飛五歩三飛八王五飛八王三銀上るにて下手方指克し且〇五歩の處六銀なら
 六歩打其次に五歩と突出して指克し
 (變化)ト八角打の處花七角打五角七歩同歩六銀右三桂七銀五桂八角二飛七歩五飛八王五
 飛八王五銀三角同角同歩六銀七桂七歩八王七銀にて下手方指宜し

下手方五
 三の銀上
 る手妙

圖二十二第

二其化變(機車飛居方手下)落車飛

皇	桂				王	桂	皇
	飛				王		
歩		歩	歩	歩	歩	歩	歩
				歩			
		歩					
歩	歩	桂	銀	銀	歩	歩	歩
		金		金			
香					王	桂	香

飛の駒引
 き自在に
 なす必勝
 也

飛車落變化其二 七十七

(變化)花七角打の處六角五角七歩 同歩六銀右三飛七銀三銀八角七歩打 同角六銀にて下手方指宜し

(變化)秋同角の處六角五角打鳥七歩打四角同角同歩よて此末本文同様にて下手方指宜し (變化)鳥七歩の處四角四角同角同歩四角打四飛二角九飛一る二金五桂打四角八王四銀四る五桂九香五銀にて下手方指宜し

上手方への角と再度打つとき一五角と下手方にて受ける手宜し飛三二へ廻り夫れより二五へ寄せ相手の王三八へ寄るとき三五銀と上手にて勝ちなり

此將基一五角と下手方にて受る手の閃々たる其電凄風地を捲き怒濤天を破るが如きの概あり、雷夫れ然るのみに止まらず此手を以て終局の勝利を斡旋するの力あるを見る真に是れ緊切の指手と言ふべきなり 然らば則ち前の一五角と下手方にて受くる手の此定石の一大伏線と云ふべきものにして、此一手が終局に至るまで宛かも曠原千里を迅走するの偉觀あらしむるものなり何ぞ之を巧手と稱せざるを得べけんや

七五の歩 突く手面 白し

下手方角 を打ち必 勝の機あり

圖三十二第

三 其 化 變 (櫓 車 飛 居 方 手 下) 落 車 飛

皇	科			王		科	皇
	飛			王			
		歩	歩	王	王	歩	
				王	王		
歩		歩	歩			歩	歩
歩	歩	桂	銀	歩	歩	歩	
		金	金		王		
香					桂	香	

飛車落變化其三 七十九

(説明) 六歩四歩六歩四歩八歩七金八歩七角七角五歩六銀三銀六歩三角七銀二銀八王六歩同歩同角
 同角同飛七歩八飛七桂二金八金三銀八王四歩八銀四金七銀二王六歩四歩九歩四歩五歩五銀五歩

(後手) 五歩風四七歩同歩六角二飛五角三銀六角五歩六歩八歩五銀八角六銀此末一三王と引落して下手方宜し

(變化) 風四七歩の處 ○ 六銀右五歩五歩同歩同銀三王六歩

(變化) 春七銀の處 六角四銀六歩五歩同歩二飛 ○ 八王五銀七角六歩五歩八歩四銀にて下手方指宜し

(變化) ○ 八王の處 七角五銀六歩四銀七銀四歩同歩四七歩同銀七歩六銀引にて下手方指宜し

七四歩と突き四六角打ち飛を引せる手の趣向あり下手方三四歩を突き角を付け込み一五より端歩を押し出し三六銀と歩を取る手宜し而して下手方の王を三一へ引き二二の飛を廻る手段を取ること順當なりとす

此下手方の指手の悉く皆な險に要に城壘を築き砲臺を置き以て大に自領を警戒し兼て敵方の指手を制束し、其敵勢の挫けるを察して一舉敵陣を侵略し去らんとするものなり手段の深遠なる碁道の秘契に合へりと云ふべし

抑も一手尙は慎重の意を以て刀斧の跡を残し、其反應力に依りて後ち皆な肯綮に中り盤上も振ひ響くの趣きあらしむるの碁家の巧手段とする所なり前に云ふ下手方三四歩を突く手の突如として起る深思あらざるものに似たり、然れども後ちに至りて忽然鼓膜を攪開し音響を振動するに似たるの妙あるの亦た誠と稱すべきなり、細心精察なること此の如き巧伏線を設けて以て勝利を期するの名人上手の古今能く爲す所なり世の碁道を學ぶ者能く考究するの参考として可なり

下手方六
三銀上る
手堅し

五四の歩
突き中堅
を固むる
手段とす

圖四十二第

四 其 化 變 (機 車 飛 居 方 手 下) 落 車 飛

香	桂	銀	王	金	銀	桂	香
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	銀	金	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
桂	飛		王	銀		桂	桂
香	歩		銀	銀		歩	歩

上手方七七銀留

(説明) 六歩 四歩 六歩 八歩 八銀 五歩 七銀 七歩 八金 四歩 五歩 六銀 七角 三銀 八金 四歩 八王 四銀
 (後手) 八王 三銀 八銀 二金 六歩 三桂 四角 四歩 七金 三金 如此駒組揚る時の上手方より仕掛け
 甚た六ヶ敷尤も上手方の手詰りなり下手方の緩々と駒組にて上手方よりの仕掛駒離れの
 虚を覗ふへし

下手方飛の掛り方を敵陣の空虚如何に依り轉し破るの策を施すへし四六の角は活動の方略
 あり雙方共互角の駒立てとす
 夫れ然り双方互角として、孰れか唯雄を決すへさかを知り易からざるの觀ありと雖ども亦
 た下手方が上手方の間隙に乗ずる所の青天霹靂疾風地を捲きて來るの概あり、上手方にし
 て若し聊か放心するが如きとあらば神飛魄驚せざらんと欲するも亦た得べけんや故に深く
 警戒して可なり

五二金上
る手よし

四四の歩
突きて大
に強し

圖五十二第

五其化變(櫓車飛居方手下)落車飛

香	桂			王	香	角	桂	香
	飛		銀	香				
歩		歩	歩			銀	歩	歩
				歩	歩			
			歩					
歩	歩		銀		歩	歩	歩	歩
	角	金		金	銀			
香	桂			王			桂	香

(説明) 七歩三歩六歩八歩七金八歩七角五歩八銀三銀六歩三角八金六銀五歩三銀八角八歩
 同歩 同飛七銀二金七歩二飛八銀四歩
 (後手) 七銀三金五歩 同歩 同角五歩八角二四王八王 同角五歩四歩打六銀引二金打にて下手方
 指宜し且六銀右の處六歩ならん三王にて宜し

上手方速かに王の圍みを專一とし角の防ぎ方肝要なり下手方飛角並ひ攻むるを主とする
 ものなれば角筋の障りを拂ひて桂銀の應援を計る其駒立により大に宜しと知るへし
 凡そ將基の兵法と同しく、己れ人に乗ずれば則ち勝ち人己れに乗ずれば則ち敗る順逆安
 危の間は則ち髪を容れざるものなり故に前の將基の駒組の下手方専ら心を用ゐて上手方の
 先手々々と指行き、以て彼れをして死地に陥らしむるを計らざるへうらず然らば則ち
 下手方が先角筋の障りを拂ふの手は是れ則ち後手の一導火にして、一晴一雨の伏する所は
 眞に機微一髪の間存するなり

七五へ歩
上る手七
六金六六
銀の動き
を肝要と
す

七六金の
敵の機に
隙んで軍
用を専一
とす

圖六十二第

六其化變(機車飛居方手下)落車飛

香	桂		王	金	銀	桂	香
	飛						
歩	銀		歩	歩	歩	歩	歩
		歩					
	歩		歩				
		金	銀				
歩	歩	角	歩	歩	歩	歩	歩
香	桂		王	金	銀	桂	香

上手方七五歩留

(説明) 七歩四歩六歩八歩七金八歩七角四歩七歩二銀七金一角七金二銀六歩三銀八銀
 春七銀七歩月六銀七歩同金七歩夏七金
 (後手) 四銀四歩同歩五歩七桂四歩同角五銀同桂同金三角四金二飛五桂同角四金七歩二金
 同金左八金六歩打にて下手方指宜し

(變化) 夏七金の處五八金九銀八金八銀同金同飛にて下手方指宜し

(變化) 月六銀の處四歩同歩七歩同銀六銀三銀引六歩四王八王三王八王三桂にて下手方指
 宜し且此如一王と指置きて其後上手方の駒所に應じて仕掛け肝要なり

(變化) 春七銀の處四歩二王六歩三金六銀左四歩七桂三銀五桂四銀三桂同金左五歩同歩四
 歩同歩同銀三歩四歩打にて上手方指宜し且上手方の八王にて指すとより又手順あらは
 七金と上りて宜し

(變化) 秋四歩の處五銀七銀四歩同歩同銀七桂五歩六歩同歩同銀右六歩同桂六飛廻るなり
 にて下手方指宜し且五歩と上手方に突込み其上角不替時の兩様とも上手方にさしたる故
 下手方不宜此故に四歩と突替りて上手方の角筋の時下手方も居飛車矢倉の時此意

味能々思慮あるべし

上手方六四歩ト突くより進撃を試み五二金にて飛を取り再度の攻撃を計る下手方五二へ飛を廻る手面白味妙なし七五歩五六歩の共に是れ妙なり機失ふ可からず掛り方は試に肝要なりと知る可し

凡そ手段の妙を施さんと欲せば機略を考ひざるべからず、攻守進退の術を施す所にして機略なくんば變化究まりなく應用自在なるを得べからず下手方能く其心得にて上手方に向ふ所なかるべけんや、若し夫れ應用自在に攻守進退するとあらん乎敵の必ず其術計に陥りて全く敗を取るに至るべきの敢て論を俟たざる所なり

下手方飛の斯引を注意すへし

圖七十二第

七其化變(機車飛居方手下)落車飛

香	桂			金	銀	桂	香
			飛	金	王	角	
歩	歩			歩	歩	歩	歩
		歩	歩	銀	歩		
		歩	歩	歩			
歩	歩	金	銀	銀	歩	歩	歩
	角			金			
香	桂			王		桂	香

上手方七七金留○下手方早四間

七五の歩に手あり

(説明) 七歩四歩六歩六歩七金二銀八銀三銀七銀四銀六歩二飛七金四歩八金二王八銀三王
七銀二金

(後手) 八王二金八王三桂七歩同歩八金五銀上る 七金四歩五歩春 七歩五歩四金打 夏四歩同
飛六銀六歩六歩打七金にて下手方指宜し但し此末五歩の手あり 四飛の廻りあり

(變化) 夏四歩の處六銀五歩六歩七歩同銀六歩七歩五歩八金同銀同桂五歩同飛六金七歩此末六
銀ならば一飛よて下手方指宜し又同銀の手五歩ならん 七金にて指宜し其後四飛の浮の手
あり

(變化) 春五歩の處同角七角七歩五歩同桂五桂同歩五角打にて下手方面白からず能々意
味肝要なり

下手方が相方の金を八六へ上るに乘し六五へ銀を上る手面白し上手方にて七五の金を上る
とさ七四歩と付け五五歩と上り角筋を支ふる手段宜し然れども下手方の駒組みは勢力強き
に依り上手方の不利なるを明らかなり

前に云ふ下手方の金を八六へ上るの姑く鋒鏗を收めて上手方の手段如何を凝視し併せて後

己の手段を施す地歩を爲すにあり、左れば夫の砂を飛ばすの暴風の起るも耳を劈くの迅
雷の發するも亦た唯た前の一手にありと謂ふへし

故又碁道の秘訣を知らんと欲せば即ち前に云ふが如き機契の所を環視注目して以て碁技を
養殖するを要す、蓋し此駒組の妙とする所の諸駒の膠離せる脈絡を糾合して能く活潑々地
の動作あらしむること是れなり夫の麻姑爪を以て痒き所を搔くの思ひあらしむるの碁道の
老手なり、豈深く思はざるべけんや

然るに上手方が傲剛愎にも下手方を翻弄せんと欲するの形勢を顯はさんとするも亦た知る
べからず、下手方の宜しく厲色して上手方の翻弄に遇はざらんことを努むべきなり

新按 高等將碁秘訣 乾の巻尾

五段允可濱島龍水大人稿按 無格伊東洋二郎筆受

○三十日 將碁獨習新法

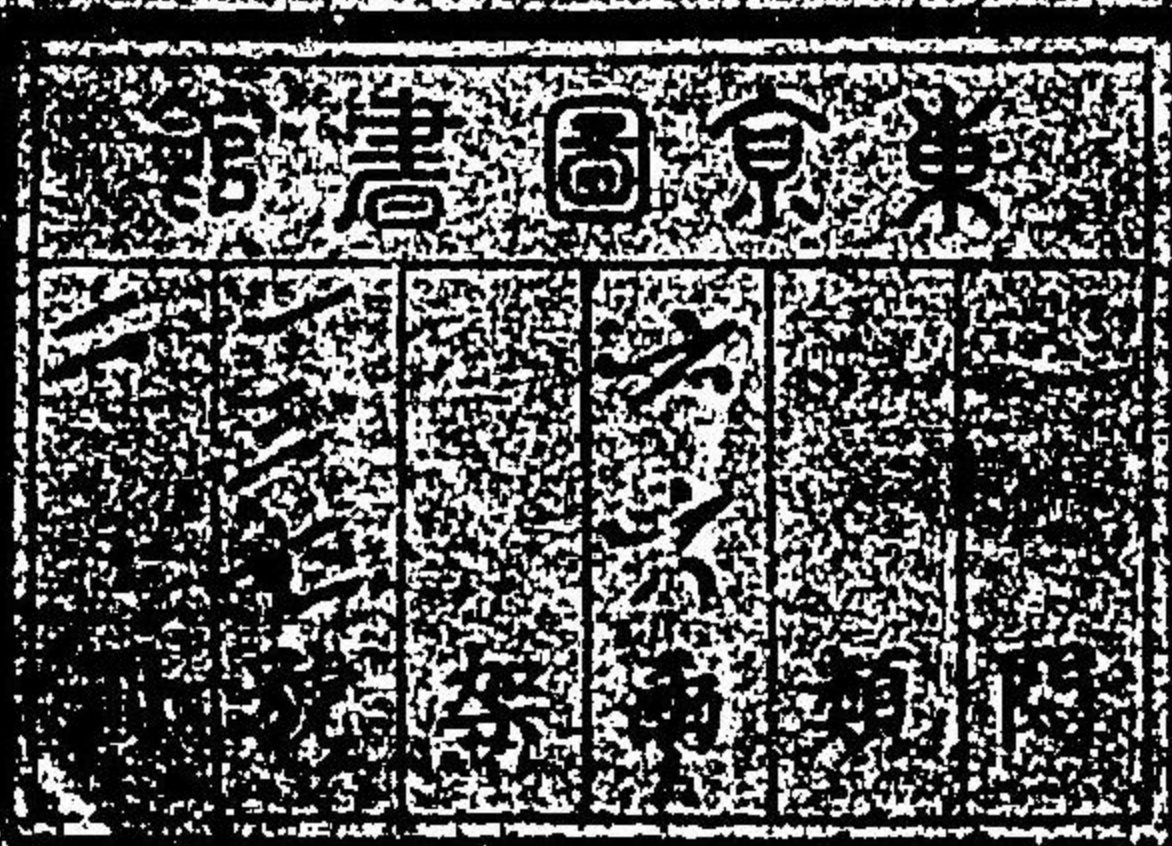
倭綴中形
全二冊

正價金貳拾五錢 郵稅四錢

本書は三十年間艱難苦勞して將碁の奧理を窮められたる龍水君が古今上手名人の千辛万苦したる跡につき其精を集め粹を抜き來りて別に獨自一個の所見を交へ以て此書を著作さるゝに至りし者にて一日に二時間つゝ其課業を獨習する事あらば僅か三十日にして初段の位格に上達し得らるへき秘訣を最も緻密に記したる新工風の將碁の稽古本なり



66
137



076202-001-4

66-137

新按定跡高等将棋秘訣

飯万島 龍水/稿

乾

M27

CEP-0268

